



Title	子どもの出来事の報告におけるドール（人形）の使用：中間報告
Author(s)	上宮, 愛; 仲, 真紀子
Citation	発達研究, 23, 215-220
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44799
Type	article
File Information	HK23_215-220.pdf



[Instructions for use](#)

子どもの出来事の報告におけるドール(人形)の使用

(中間報告)

神戸女学院大学人間科学研究科 上 宮 愛
北海道大学文学研究科 仲 真 紀 子

anatomical doll, sexual abuse, forensic interview

子どもに対する性的虐待や性犯罪は、子どもと虐待者(加害者)の2人だけの空間で起こる場合が多い。また、性的虐待、性犯罪の特徴として、子どもの身体に目に見えるような形であざや傷が残りにくく、事件より時間が経過すると証拠が乏しくなる。そのため、子どもたちの証言だけが唯一証拠となるようなケースも多い。しかし、性的な出来事について子どもたちに報告を求めるのは非常に困難である。一つには、子どもたちが性的な概念や行為について知識を持ち合わせていない、性的な事柄について誤った理解をしている可能性がある。また、虐待経験のある子どもたちは、一般児に比べて認知能力や言語能力の発達が遅れている傾向があるといわれている(Hoffman-Plotkin & Twentyman, 1984)。

アメリカでは、子どもを対象とした、性的虐待の被害の聞き取りにおいて、アナトミカル・ドール(anatomical doll; anatomically detailed dolls)といわれる人形が用いられている。アナトミカル・ドールとは「解剖学的に正確な人形」という意味であり、ドールには男性性器や女性性器、胸のふくらみ、陰毛などが備わっている。このドールは、身体部位の名称を正しく理解しているかの確認や、性的な被害の有無の確認、その内容について聞き取りなどに用いられる。用途の一つである、性的な被害の有無の確認では、子どもたちにドールで自由に遊ばせ、それを観察し、性的な反応、恐怖反応、攻撃行動の有無によって、実際に性的被害を受けているかどうかを診断する。しかし、子どもは、飛び出ているものは引っ張り、穴が開いていれば指を入れてしまうものである。このような反応が必ずしも性的虐待の有無に直結するとは考えられないため、ドールを性的被害の有無の診断に用いることについては議論がある(越智, 1998 参照)。

一方、ドールを身体部位の確認や聞き取りの際の補助具として用いることは有効であり、誘導性が少ないと考えられている(Everson & Boat, 1994)。例えば、性器の呼び名は子どもや家庭によって異なり、大人が一般的に用いている名称とは異なる用語が用いられていることもある。そのため、子どもたちが指しているものが実際には身体部位のどこにあたるのかを何らかの方法で確認する必要がある。また、性的行為についても、誤って理解している場合があるかもしれない。ある例では、子どもが「セックスした」という報告を行ったが、ドールを用いて実演させたところ、衣服の着脱や挿入行為はなかったことが明らかとなった。このようなケースでは、ドールが子どもたちの言語報告を確認、補助する道具としての役割を果たしているといえる。

本研究では、アナトミカル・ドールの出来事の報告における補助具としての側面について検討する

ことを目的とし、まず、先行研究のレビューを行った。中間報告として、そのレビューの一部を報告する。

1. 出来事の報告におけるドールの補助具としての妥当性

アナトミカル・ドールを用いて出来事を報告させる研究で問題となるのは、面接の中でどのようにドールを用いれば子どもたちにとってドールが誘導にならないかということである。

Leventhal, Hamilton, Rekedal, Tebano-Micci, and Eyster(1989)は、性的虐待が疑われる7歳以下の子どもへの、ドールを用いた面接の記録を検討した。子どもたちは、まずドールなしの面接を受け、その後ドールを用いた面接が行われた。その結果、ドールを用いた面接では、ドールを用いない場合に比べ、性的虐待に関する情報や虐待者を特定するような情報の割合が増加することが示された。この結果では、一見ドールを用いて面接を行った方が、虐待の検出において効果的であるように思われる。しかし、この研究では、ドールを用いる面接と用いない面接の順序についてカウンターバランスなどの統制が行われていないことや、子どもの報告の正確性については検討されていない。そのため、ドールを用いることで増加した情報が本当に信頼できるものかどうかについて言及することはできないといえる。

それに対して、Saywitz, Goodman, Nicholas and Moan (1991)は、より統制のとれた、小児科での検診という体験について報告させる手続きを用いている。5歳児と7歳児72名のうち半分の参加者は小児科で性器の検診を受け(性器検査あり条件)、残りの参加者は脊柱側弯検査を受けた(性器検査なし条件)。1週間後、もしくは、1ヶ月後、参加者に検診の内容について自由報告を求め、その後、アナトミカル・ドールで出来事を実演するよう求めた。面接では、誘導的な質問も行われた(例：先生にキスされましたか?)。その結果、自由報告に比べ、ドールを用いた報告では正確な情報が増加した。また、性器や性的行動に関する誤った報告はドールを用いた場合でも見られなかった。性器検診あり条件では、多くの参加者が、自由報告、ドールを用いた報告の両方で、性器の触診について報告することを忘れていた。このような場合、子どもたちに直接「お医者さんはここ(性器)を触りましたか?」とドールを用いて質問したところ、正確に性器に関する報告が行われた。類似した研究にBruck, Ceci, Francouer & Renick(1995), Gordon, Ornstein, Nida, Follmer, Crenshaw & Albert(1993), Katz, Schonfeld, Carter, Leventhal & Cicchetti(1995)があり、これらの研究でも3歳以上の参加者であれば、ドールを用いて面接を行うことの有効性が示されている。

一方、ドールの効果が見られなかったという研究も存在する

Goodman and Aman (1990)は、虐待経験のない3歳児と5歳児を対象に調査を行った。子どもたちは男性実験者と遊ぶという出来事を体験する。その1週間後に、①アナトミカル・ドール、②普通のドール(アナトミカルドールと見た目は同じであるが、性器などがついていないドール)を用いる条件、③アナトミカル・ドールが見える位置においてあるが、実際には使わないで言語報告だけを求める条件、そして、④ドールが全くない言語報告だけの4条件に割り当てられた。面接では、自由報告、特定質問に加え、誘導的な質問も行われた。その結果、誘導的な質問に対する誤った報告、また、正確な報告は、人形の種類や人形の有無によって違いは見られず、どの条件でも差は見られなかった。し

かし、自由報告、特定質問、誘導質問の全てで3歳児では5歳児に比べて正確な報告が少なかった。

また、Lamb, Hershkowitz and Sternberg(1996)では、4歳から12歳の虐待経験のある子どもへの面接記録を検討し、子どもの発話の長さ、情報量などについて分析を行っている。その結果、ドールを用いた場合と用いない場合の比較では、子どもの報告した情報量、語彙数に違いは見られなかった。しかし、子どもたちの発話の長さの平均を比較したところ、ドールを用いた条件に比べて、ドールを用いない条件では、発話が長く、詳細であることが示された。この結果から、ドールが子どもたちの報告の可能性を逆に妨害している可能性があることが示唆された。

2. 何歳頃からドールを用いた面接は効果的か(発達の要因と年齢)

先行研究でみてきたように、ドールを用いる面接では、年齢が重要となる。上記のドールによる有効な結果が得られた研究においても、3歳児ではほとんどの研究で、有効な結果が得られていない。ドールを用いて出来事を報告するには、ドールを自分の象徴として理解し、体験した内容をその象徴を用いて再現しなければならない。このような能力には発達の段階が大きく関係すると思われる。実際に、Goodman and Aman(1990)では、3歳児に人形を用いて体験した出来事を報告するように求めたところ、参加者の中には困惑した様子を示す者もあり、「私は人形じゃないよ」と答える者も見られた。

DeLoache and Marzolf(1995)では、2歳半、3歳、4歳の子どもの対象に、自分の体験した出来事を人形で再現する調査を行った。子どもたちは、①実験者が絵本のストーリーに沿って子どもの身体にシールを貼っていく、②実験者が子どもの体を、出された指示通りに触る(サイモンさんの言う通りゲーム)の2つのゲームを体験する。その後、子どもは人形を自分に見立てて、実験者が子どもに行ったことを同じように、人形に対して実演するよう求められた。その結果、4歳頃には、人形を用いた実演が可能となった。3歳以下では、人形を自分であると理解することが困難であるといえる。

本来ドールを用いる目的の一つには、言語能力に困難がある年少児であっても、言語に代わる支援道具を用いて出来事の報告が可能になることを助けるということがあった。しかし、先行研究の結果からは、年少児の報告において、ドールは補助具の役割を果たさず、逆に誤った報告を増やす可能性があることを示唆している。

3. どのような道具を面接で用いるか

アナトミカル・ドールでは、人形に加えられた性器や胸のふくらみなど、人形の持つ性的な情報が子どもたちにとって誘導となってしまいうという問題がある。それでは、アナトミカル・ドールではない人形を用いたらどうであろうか。

Britton and O'Keefe(1991)は、2歳から10歳の虐待経験のある子どもに対して、1年目はアナトミカル・ドールを用いて面接を行い、2年目は同じ面接官によって、普通のドールを用いて面接を行った。その結果、どちらの人形を用いた場合でも性的な報告の割合に違いは見られなかった。この調査では、ドールを用いる順序が統制されていない上に、子どもたちに同じことを2度質問しているため、報告に違いが見られなかった可能性がある。Goodman and Aman(1990)では、アナトミカル・ドール

と、見た目はアナトミカルドールと全く同じであるが、性器や胸のふくらみなどがついていない普通のドールを用いた場合を条件間で比較している。その結果、人形の違いによる正確な報告、誤った報告の割合ともに差は見られなかった。

また、どのような道具を用いるかということについて、Salmon, Bidrose & Pipe(1995)では、体験した出来事与实际に用いられた道具を用いる場合とおもちゃの道具(用いられた道具を象徴するようなもの)を用いる場合について検討している。3歳児と5歳児の参加者は、実験者と一緒にクマのぬいぐるみの、「おでこの熱を測る」「心音を聴診器を使って聞く」などいくつかの行為を行う。2, 3日後、①実際の体験で用いた道具とクマのぬいぐるみを用いる(現実器具条件)、②おもちゃの道具と実際のクマよりも小さいクマのぬいぐるみを用いる(おもちゃ条件)、③道具を用いない(道具なし条件)3つの条件に割り当てられ、出来事の報告を行った。参加者は、自由報告を行った後、道具を使って出来事を再現するよう求められた。その結果、5歳児ではおもちゃ条件、現実器具条件の両方で、言語報告と動作による報告、両方の情報量が増加したのに対して、3歳児では動作による報告のみが増加した。

また、どの年齢群でもおもちゃ条件では現実器具条件に比べて誤った報告が多かった。道具を用いることにより、情報量は増加するが、おもちゃを用いた場合には、遊びによる誤った情報が増える可能性が示唆された。子どもたちへの面接において、どのような道具を用いるかということも重要な課題である。

4. 今後の課題

日本では、アナトミカル・ドールの使用について研究がほとんど行われていない(越智, 1998)。Boat and Everson (1994)によれば、虐待を受けていない子どもでも社会的地位、経済状況、人種などによって、ドールに対して性的な反応を示す割合が異なると言われている。そのため、日本でアナトミカル・ドールを用いる場合には日本の子どもたちがドールに対してどのような反応を示すかを検討する必要がある。しかし、日本において、実際に子どもたちに対してアナトミカル・ドールを用いて調査を行うことには倫理的な問題もあるため、本研究では、日本の子どもを対象とし、普通の人形を用いて出来事を報告することの効果を検討する。

本研究の第1の目的は、まず日本の子どもたちを対象に、出来事の報告において、人形を用いることの効果について検討することである。その際、日本の子どもたちでは何歳ごろから、出来事を報告する際に人形を用いることが有効であるかについても検討する。

本研究の第2の目的は、子どもたち自身が出来事を体験する場合と、他者の行為を目撃する場合における、ドールの使用の効果について検討することである。このことにより、性的虐待、性犯罪のみならず、様々な場面、例えば子どもが被害者ではなく、目撃者である場合などの聞き取りにおける人形を用いた報告の有効性を議論することが可能になると思われる。

今後は、実際にデータ収集を進めていくことが課題である。

引用文献

- Boat, B. W. & Everson, M. D. (1994). Exploration of anatomical dolls by nonreferred preschool-aged children: Comparisons by age, gender, race, and socioeconomic status. *Child Abuse & Neglect, 18*, 139-153.
- Britton, H. L. and O'Keefe, M. A. (1991). Use of nonanatomical dolls in the sexual abuse interview. *Child Abuse & Neglect, 15*, 569-573.
- Bruck, M., Ceci, S. J., Francouer, E. & Renick, A. (1995). Anatomically detailed dolls do not facilitate preschoolers' reports of a pediatric examination involving genital touching. *Journal of Experimental Psychology: Applied, 1*, 95-109.
- Deloache, J. S. & Marzolf, D. P. (1995). The use of dolls to interview young children: Issues of symbolic representation. *Journal of Experimental Child Psychology, 69*, 155-173.
- Everson, M. D. & Boat, B. W. (1994). Putting the anatomical doll controversy in perspective: An examination of the major uses and criticisms of the dolls in child sexual abuse evaluations. *Child Abuse & Neglect, 18*, 113-129.
- Gordon, B. N., Ornstein, P. A., Nida, R. E., Follmer, A., Crenshaw, C. C. & Albert, G. (1993). Does the use of dolls facilitate children's memory of visits to the doctor? *Applied Cognitive Psychology, 7*, 459-474.
- Goodman, G. S. & Aman, C. (1990). Children's use of anatomically detailed dolls to recount an event. *Child Development, 61*, 1859-1871.
- Hoffman-Plotkin, D. & Twentyman, C. T. (1984). A multimodal assessment of behavioral and cognitive deficits in abuse and neglected preschoolers. *Child Development, 55*, 794-802.
- Katz, S. M., Schonfeld, D. J., Carter, A. S., Leventhal, J. M. & Cicchetti, D. V. (1995). The accuracy of children's reports with anatomically correct dolls. *Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics, 16*, 71-76.
- Lamb, M. E., Hershkowitz, I. & Sternberg, K. J. (1996). Investigative interviews of alleged sexual abuse victims with and without anatomical dolls. *Child Abuse & Neglect, 20*, 1251-1259.
- Leventhal, J. M., Hamilton, J., Rekedal, S., Tebano-Micci, A. & Eyster, C. (1989). Anatomically correct dolls used in interviews of young children suspected of having been sexually abused. *Pediatrics, 84*, 900-906.
- 越智啓太 (1998). アナトミカルドールを用いた性的虐待児へのインタビュー;アナトミカル・ドール論争の展望. *犯罪心理学研究, 36*, 33-46.
- Saywitz, K. F., Goodman, G. S., Nicholas, E. & Moan, S. (1991). Children's memories of physical examinations involving genital touch: Implications for reports of child sexual abuse. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 59*, 682-691.
- Salmon, K., Bidrose, S. & Pipe, M. (1995). Providing props to facilitate children's event reports: A

comparison of toys and real items. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60, 174-194.